令和6年能登半島地震　災害ボランティア　活動報告

【報告：同朋社会推進部会副部会長　清澤和音】

岡崎教区では、6月6日から7日にかけて石川県珠洲市でボランティア活動を行いました。教区教化委員会同朋社会推進部会から7名（部会員6名・石川駐在）が派遣され、レンタカーのハイエースに炊き出しの食材を積んで向かいました。1月1日の震災から半年が経ち、ようやく足を運ぶことができました。

今回の活動をコーディネートいただいたのは、小松大聖寺教区西照寺の日野史（ひの ふみ）さんです。「こまつ子ども食堂」の代表でもあり、能登で何度も炊き出しをされている方です。小松から合流し、日程中同行いただきました。

初日は、能登教務所に設置された「宗派ボランティア支援センター」を訪問し、所員から教区内の被害状況を教えていただきました。

その後「のと里山海道」を通って輪島へ向かいました。輪島方面へは通行可能でしたが金沢方面は一部通行止めでした。時折、迂回しながら段差のある道を通り、陥没、土砂崩れ、車が未だに数台落ちているのを見かけました。朝市の火災現場で車を降りると、まるで戦場のような光景が広がっており、車や鉄筋は焼け焦げ、瓦礫と化していました。1月1日から時が止まっているかのようでした。道の脇には、お内仏の鶴亀の燭台が一対、土香炉と仏器とともに置かれていました。瓦礫の中から拾い上げた人はどんな思いでここへ置いたのでしょう。

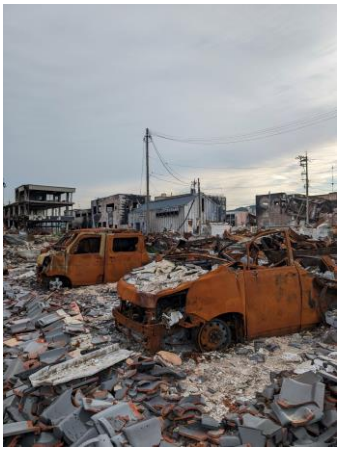
そして、朝市にほど近い浄明寺さんへお見舞い訪問し、若院さんご夫婦に震災当時のようすを伺うことができました。お墓が崩れるなどの被害がありましたが、本堂・庫裡の倒壊は免れ、注意しながら住まわれているとのことです。一時は地元の方々に仮設のお風呂を開放されたそうです。若院さんは地域に寄り添いながら精力的に炊き出しボランティアもされています。

この日は、能登教務所に宿泊し翌日に備えました。教務所のある七尾市は比較的に復旧が早く、入浴施設や食事を提供するお店も再開されていました。

輪島市内の倒壊したビル

家屋に押しつぶされた車

道の脇に置かれた仏具


火災で燃え残った車

朝市の火災現場

浄明寺本堂と倒壊した常夜灯

２日目は、炊き出しをする珠洲市の大谷小中学校へ向かいました。朝6時半に能登教務所を出発し、３時間かけてたどり着きました。この学校は、全校児童数が小中学校合わせて6名です。現在授業は再開されていますが、その体育館では近隣の方々が現在も段ボールで仕切られたわずかなスペースで避難生活を送られていました。

炊き出しのためお借りした学校の調理室は一部水道が使用できるものの、珠洲市内のほとんどが未だ断水が続いているそうです。

調理は、石川県内で子ども食堂をされている方々と一緒にしました。メニューは「焼き豚ネギ丼」と愛知より持ち込んだ「きしめん」を、それぞれ100食分提供しました。

体育館には避難者や近所の方々が30人ほど食べに来られました。中には「最近食べたものの中で一番おいしかったよ、ありがとう。」と言ってくださり、その何気ない一言に思わずこみ上げてくるものがありました。被災されながらも住み慣れた街に残り、懸命に生きられている姿に心うたれました。

活動後に、珠洲市の日本海側の外浦から、富山湾側の内浦の沿岸部をぐるっと回って視察しました。外浦は広範囲にわたって地盤が隆起し、海が遠ざかっていました。地元の方の話しでは、大津波が予想され急いで高台に避難したものの地盤が高くなったことで、津波が到達しなかったそうです。内浦の蛸島地区は特に家屋などの被害が大きく、解体もまったく進んでいませんでした。信号や案内標識も傾いたままです。

そして、珠洲市役所にほど近い西勝寺さんへお見舞い訪問し、前坊守さんからいろいろお話しを伺うことができました。幸いご本尊と仏具は、2023年5月5日の大地震（震度6強）で本堂が傾いてしまった時点で、庫裏へ避難させてあったそうです。全壊した本堂を前に言葉が出ませんでした。

能登の青く澄んだ空と海。穏やかな海の反対側では土砂崩れや建物が無残にも倒壊していました。生と死は隣り合わせなんだと感じずにおれませんでした。

「能登はやさしや土までも」。この言葉は、能登の人たちのやさしい人柄をあらわす言葉だそうです。この土地に根付いた真宗の教えに裏打ちされたものだと思います。

最後に岡崎教区では、今後も被災地に寄り添って、ボランティア活動など息の長い支援を行ってまいりますので、皆さまのご協力を切にお願い申しあげます。

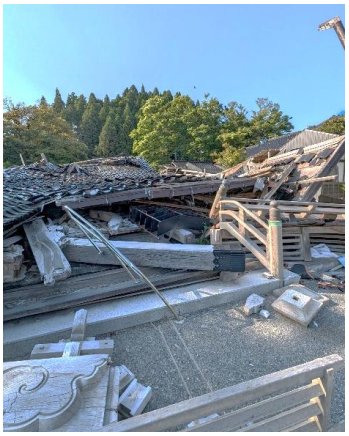
豚丼の盛り付け

きしめん100食

食事提供のようす

地盤が隆起した海岸線

甚大な被害の蛸島地区


全壊した西勝寺本堂